

東日本大震災から現在までの普代村

岩手県 普代村総務課消防防災担当 安田 要

1. 普代村概要

普代村は岩手県北部海岸に位置し、下閉伊郡の最北端にあり、東方一帯は太平洋に面し、南は田野畑村、北は九戸郡野田村、西は岩泉町に接している。太平洋に臨む沿岸地区は、標高約 150m の海岸段丘が連なり、わが国随一の景観、陸中海岸国立公園の黒崎・北山崎控え、この公園を代表する豪壮雄大な断崖絶壁が連続し、絶景の一語に尽きる自然美をなしている。また、黒崎灯台の設置されている黒崎沖は、三陸漁場の心臓部ともいわれ、資源の豊富な漁場として知られている。

山間部は、北上山系が連なり、本村をはじめ「山の幸」も豊富で、特に山間部一帯の地下資源、大理石、石灰岩、マンガンの埋蔵量は無尽蔵といわれている。本村の産業は、第一次産業の漁業・水産養殖業が大部分を占めている。

昭和 47 年 10 月の国道 45 号全線開通、昭和 59 年 4 月の三陸鉄道北リアス線の開通とともに総合的な開発を進めてきた。さらに、山間地を利用した自然休養村整備事業、農地開発事業、観光産業にも力を注いでいる。



図 1 普代村位置図
(出所：普代村)

2. 東日本大震災の対応と課題

(1) 被害の概要

平成 23 年 3 月 11 日 14 時 46 分ごろ、宮城県沖を震源とするマグニチュード 9.0 の巨大地震が発生した。普代村では、震度 5 強の大きな揺れが数分間にわたって続き、15 時 27 分に津波が襲来した。明治三陸大津波（明治 29 年 6 月 15 日）と昭和三陸大津波（昭和 8 年 3 月 3 日）で死者を出した太田名部地区と普代地区では、それぞれ、太田名部防潮堤と普代水門が津波を食い止めたことにより、住家には被害がなかった。しかし、津波の高さは、太田名部地区で 8.9 メートル、普代で 24 メートルであった。

普代村内での死者はなかったものの、未だ 1 名が行方不明となっている。また、村内在住者で近隣の市町村で亡くなった方も 7 名であり、その多くが車等での移動中に被害に遭

うかたちとなった。

漁業関連の被害額は 36 億円にも上り、村内の漁港 7 か所すべてが壊滅的な被害を受け、船舶、加工場、漁業資材等にも多数の被害があった。村全体で 603 隻あった船舶のうち、538 隻が流出または破損し、村内全体で 174 棟の非住家の中で多くが水産関係の施設であった。

（２）普代水門・太田名部陸閘について

普代村の中心部は、普代川に沿って形成されている。普代川河口から約 300 メートル上流に建設された普代水門（写真 1：昭和 59 年建設、総延長 205 メートル、高さ 15.5 メートル）は、役場や普代分署などがある村中心部に津波を到達させることなく被害を最小限にとどめた。しかしながら、津波は水門建屋の換気口から海水が入った形跡があることなどから、高さ 15.5 メートルの普代水門を越え 24 メートルまで達したことが分かっている。津波は普代小学校の道路、普代漁協付近まで浸水した。

普代水門と同じ高さをもつ太田名部堤防（写真 2：昭和 42 年建設、総延長 155 メートル、高さ 15.5 メートル）は高さ 8.9 メートルの位置で津波に耐え、住宅地への浸水を食い止めた。防潮堤の外側の漁港では、壊滅的な被害となったものの、防潮堤内側は浸水せず、住家への被害はなかった。



写真 1 普代水門



写真 2 太田名部堤防

（３）東日本大震災における教訓と課題

東日本大震災による人的・物的被害について、明治 29 年、昭和 8 年三陸大津波と比較した場合、表 1 のようになる。死者数・被害家屋数共に大幅な減少となっており、昭和以降に培ってきた普代村のハード面における防災対策は成果を挙げたと考えられる。

一方で、課題もあった。当時、避難所に指定されていた学校や公民館等には災害用備蓄資材がなく、災害救援用品等の用意に時間を要した。また、学校等についても避難場所について明確に確定していない面もあった。

表 1 明治・昭和・東日本大震災における被災家屋及び死者数

	明治三陸地震 (明治 29 年)	三陸沖地震津波 (昭和 8 年)	東北地方太平洋沖地震 (平成 23 年)
死者数 (人)	302	137	0 (7)
被災家屋数 (棟)	71	79	0

出所：「普代村 東日本大震災記録誌」より著者が東日本大震災の数値を加えたもの

3. 2 度にわたる台風対応と課題

(1) 平成 28 年台風 10 号

8 月 30 日、東北地方の太平洋側に初めて上陸した台風 10 号によって、夕方から夜にかけて局地的に猛烈な雨と非常に強い風が観測され、海上はうねりを伴い猛烈なしけとなった。

当村においては、村中心部を流れる普代川が氾濫し、多くの家屋が床下・床上浸水したほか、村内各地で倒木、土砂災害による道路被害等が多く発生した。

住家については、全壊 1 棟、大規模半壊 2 棟、半壊 20 棟、床下浸水 51 棟、一部損壊 1 棟の被害を受け、また非住家の 65 棟が浸水した。

台風 10 号における普代村の課題として、情報伝達の際に時間を要してしまった点が挙げられる。豪雨災害時の放送用例文が用意されていなかった点や、土のう等の備蓄資材の整備等についても課題が挙がった。

(2) 令和元年台風 19 号

東日本大震災以後、普代村に大きな影響を与えた災害として、令和元年 10 月 12 日に上陸した台風 19 号が挙げられる。全国で 104 人の方が亡くなった災害であったが、村内における死傷者はなかったものの、住家に限れば、124 棟（全壊 1 棟、大規模半壊 6 棟、半壊 34 棟、準半壊 6 棟、半壊に至らない 77 棟）の被害をもたらした。東日本大震災以上の数であった。また、非住家については、155 棟が浸水となっていた。

台風当日の 12 日 13 時から村内の 5 箇所（普代村役場、自然休養村管理センター、B & G 海洋センター、黒崎地域拠点活動施設、芦渡多目的集会施設）に避難所を設置し、12 日から 13 日の間に避難を実施した 96 世帯 196 人の受け入れを行った。

台風 19 号災害における普代村の課題として、避難の遅れが目立った。当日の日没時間帯である 17 時までに避難した住民は 11 人で村全体の避難者が 196 人であったことを考えると、ごく少数であった。一方、屋外の移動が危険と思われる 21 時から 24 時 30 分までの避難者数は 50 人以上に上っていた。

これらのことから、避難に関する情報の周知や、早期避難を意識づけてもらうための取

り組みの実施は今後の課題として挙げられた。

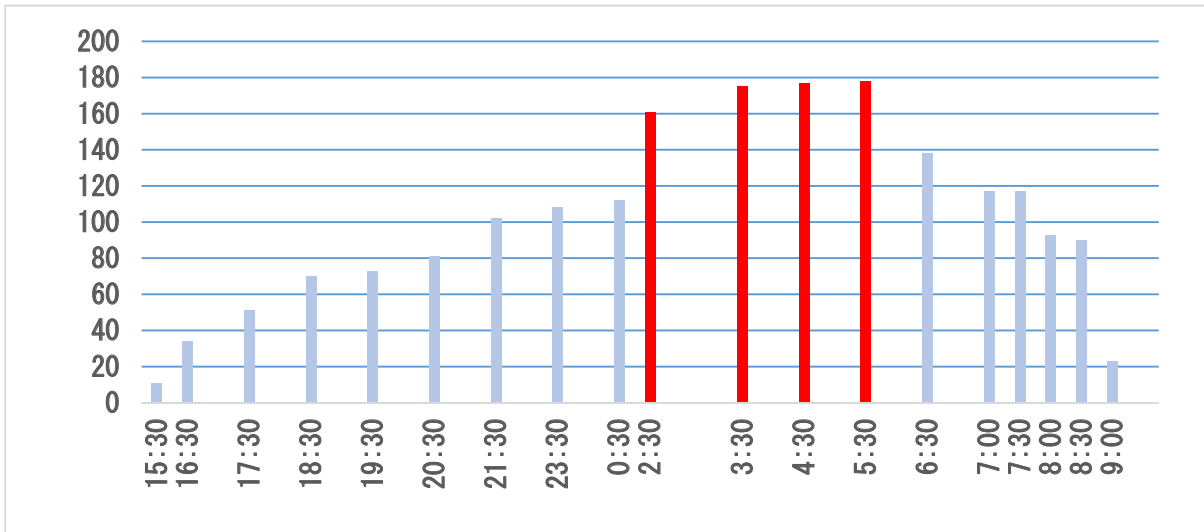


図2 台風19号における時間毎の避難者数
(出所：普代村)

表2 台風19号における普代村内の避難者数

(10月12日～13日)		単位:人	
避難所	人数	避難者	
		世帯数	人数
普代村役場		39	76
自然休養村管理センター		22	41
B&G海洋センター		33	75
黒崎地域活動拠点施設		2	4
芦渡多目的集会施設		0	0
計		96	196

出所：普代村

4. 現在の防災対策

(1) 防災倉庫の増設

東日本大震災における課題点でもあった、各施設への救援物資の配置については、村内の学校や集会施設等の災害時の指定避難所数か所に防災倉庫を設置し、避難所物資を備蓄することによって、対応可能とした。

また、今後については、現在計画中的の災害後方支援拠点広場にも防災倉庫を設置し、災害用物資の拡充を進めていく予定である。

(2) 災害学習・住民周知

災害対策強化の一環として力を入れてきたのが、普代村の総合防災訓練である。

台風 10 号災害以降、総合防災訓練で水害対策の訓練を導入し、地震津波災害と交互に訓練を実施してきた。また、コロナ禍で、大規模な訓練が実施できなかったため、代替として、職員の感染症対策用パーテーションや、小型テントを用いた訓練を行い、感染症が発生した場合に備えた避難所運営ができるような体制づくりを目指している。

また、住民周知については、令和 2 年度より、行政情報配信アプリを導入し、このアプリの中で気象警報等の情報配信を行うことで、より住民への周知を強化する対策を実施している。



写真 3 平成 29 年普代村総合防災訓練の風景
(中学校生徒・周辺住民の避難)
出所：普代村

(3) 後方支援拠点について

令和元年台風 19 号では、数百人規模の自衛隊が派遣された前例もあり、外部の応援部隊が受け入れられる体制づくりの一環として、現在、久慈消防署普代分署付近に、物資の備蓄や支援拠点整備のための後方支援拠点広場の計画策定を実施している。

5. おわりに

近年、普代村は東日本大震災、台風 10 号災害、台風 19 号災害と、近年大きな災害に見舞われながらも、震災での住家被害が無かった点や、台風 10 号、19 号災害での死者ゼロなど、被害を抑えてきた側面がある。そのような中で、近年見直されている普代川の浸水想定や、日本海溝地震等の想定等、より、甚大な被害を及ぼす災害の発生が予想される中で、今後も、被害を最小限に抑えるための取り組みを実施していきたい。